



# 安田豊作氏へのインタビュー記録(3) : 北条プラン に関する補足的事項の探索

瀬川, 千裕

---

(Citation)

研究論叢, 30:101-108

(Issue Date)

2024-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491465>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491465>



# 安田豊作氏へのインタビュー記録（3）

## —北条プランに関する補足的事項の探索—

瀬川 千裕

（神戸大学大学院博士課程後期課程）

### 1. はじめに

本稿は、『研究論叢』27号、28号に掲載された「安田豊作氏へのインタビュー記録（1）」および「安田豊作氏へのインタビュー記録（2）」の解説（補足を含む。）である。本インタビューは、千葉県館山市立北条小学校（以下、北条小学校と略称）の教育課程編成プラン、北条プランの作成と運営に尽力した安田豊作氏（1911-2017年）に対して、2016年7月29日におこなったものである。

本稿では、まず、本インタビューの背景と意図についてまとめる。次に、本インタビューを通じて明らかになった点を挙げる。最後に、本インタビューの意義と課題を検討する。

### 2. インタビューの背景と意図

#### （1）背景

1947年版学習指導要領が「試案」として公表されたことを受け、全国各地の学校・教師たちが自主的なカリキュラム編成に取り組んだ。自主的なカリキュラム編成の動きは、1948年10月のコア・カリキュラム連盟（1948-1953年／以下、コア連と略称）の結成によって、カリキュラム運動として集約される。コア連は、梅根悟、海後勝雄を中心とし、石山脩平、和泉久雄（北条小学校）、樋口澄雄（東京都港区立桜田小学校）ら計10名の教育学者や教師が発起人となり、70余名、全国59校とともに出発した。結成の翌年、1949年1月、コア連は機関誌『カリキュラム』を発行した。機関誌『カリキュラム』は多いときには3万部を売り上げ、学校現場への影響力の高さから

「民間文部省」といわれた（中野1982：190／金馬2004：534）。コア連は「コア（中心）と周辺の2層からなる、教科の枠を超えた統合的なカリキュラム」（斉藤2001：452）を、地域の生活や子どもの興味・関心をもとに編成することを志向した。いわゆるコア・カリキュラムである。コア・カリキュラムは深められ、コア連結成から約3年後の1951年8月、「三層四領域」を提唱した。「三層四領域」とは「学習場面としての日常生活課程、中心課程、系統課程の『三層』と、学習内容としての健康、経済（自然）、社会、文化（教養、娯楽）」（新井2001：24）の「四領域」から構成されるカリキュラム構造である。コア連は生活経験主義にもとづくカリキュラム構造論を追究した。

しかし、当時のコア連は、①梅根や海後といった研究者がコア連の中心的人物であり、②「民間文部省」として生活経験主義にもとづくカリキュラムを啓蒙していた。そのため、当時のコア連は理論的研究を進めることはできなかったが、学校現場におけるコア・カリキュラムや「三層四領域」、アチーブメント・テスト等の研究成果の受け止め方まで十分に検討することはできていなかった。たしかに、機関誌『カリキュラム』に、それらの受け止め方、理論の実践への適用は垣間見える。しかし、コア連としてそれらの受け止め方、理論の実践への適用を調査し整理してきたとはいえない。

コア連の強い影響を受けた教育課程編成プランの1つが北条プランである。北条プラン

とは、1946-1955年に北条小学校にて実践されたコア・カリキュラムの理論にもとづく教育課程である。最終的には、生活コース・教科コース・基礎コースの3層のカリキュラム構造に至った(林1996:140)。教育課程編成プランとして、当時より全国で知られていた。北条プランの作成に、コア連の中心的人物である海後が関与している。また、北条プランの作成時、校長であった和泉はコア連の発起人に名を連ね、コア連初代副委員長を務めた人物である。北条プランは、海後と和泉という2人の人物を通して、コア連と密な繋がりにあった。また、「3層4領域カリキュラム構造理論の北条小への応用導入」(林1996:141)もあり、北条プランはコア連の理論の影響も受けていた。コア連と関係を持ち、コア連の理論の影響を受けていた学校は多くはない。しかし、海後の助言や「三層四領域」の導入を除き、具体的にどのような影響を受けていたのかについては明らかになっていない。

北条プランの作成に携わった人物として、安田氏がいる。安田氏は戦前より北条小学校に勤務しており、戦後の北条プランが実践された時期に教頭を務めていた。安田氏は、和泉校長のもとで教員の先頭に立ち、北条プランを運営していたことが推察される。北条小学校がコア・カリキュラムを放棄した直後の1960年、安田氏は再び北条小学校に着任し、校長として放送教育に取り組んだ。安田氏の北条小学校の在職期間は26年に及んだ。安田氏は機関誌『カリキュラム』をはじめ、戦前より、諸種の雑誌等に多くの論考を寄せている。安田氏の略歴は以下の通りである。

【表1】安田豊作の略歴

|        |          |
|--------|----------|
| 1911年? | 生誕       |
| 1931年  | 白浜小学校に着任 |
| 1932年  | 短期現役兵に入営 |

|       |                                              |
|-------|----------------------------------------------|
| 1937年 | 北条小学校に着任<br>(1944-1945年出兵)<br>(1949-1951年教頭) |
| 1951年 | 富崎小学校に着任(校長)<br>千葉県指導課に在籍、4年で鴨川小学校に転任(校長)    |
| 1960年 | 北条小学校に着任(校長)                                 |
| 1972年 | 館山市教育長に就任                                    |
| 1984年 | 館山市教育長を退任                                    |
| 2017年 | 没                                            |

(安田豊作・北条教育を語る会(1986)  
をもとに筆者が作成。)

## (2) 意図

安田氏は、近年では、2007年にインタビューを受けている(金馬2019)<sup>1)</sup>。安田氏へのまとめたインタビュー記録として『未来への年輪』(東洋館出版社、1986年)がある。『未来への年輪』には、本インタビューが対象としている戦後新教育期(1945-1959年)の北条小学校の様子に関する記録がある。ただし、『未来への年輪』は、安田氏の自由な語りの記録となっており、ある特定の意図をもったインタビューではない。本インタビューは、インタビューの実施に際して事前に質問事項を伝えた。本インタビューは、安田氏が「あなたの手紙があつてね、思い出したこと書いてある」といったように、事前の質問事項に対する回答を中心としたものとなっている。

【表2】インタビューの内容

|                                            |
|--------------------------------------------|
| ○北条プランについて                                 |
| ・戦後「新教育」の様子について                            |
| ・戦後「新教育」期(1940年代後半から1950年代前半)の北条小学校の様子について |

- ・北条プランにおける教育観について
- ・和泉久雄先生のことにについて
- 安田豊作先生の教育について
- ・雑誌『カリキュラム』に投稿された原稿について
- コア・カリキュラム連盟について
- ・コア・カリキュラム連盟の様子について
- ・北条小学校とコア・カリキュラム連盟の関係について
- その他
- ・戦後「新教育」期の北条小学校の教育に関するお話全般

（「安田豊作氏へのインタビュー記録（１）」より再掲。）

本インタビューは、北条プランの作成および運営の実態を明らかにするものではない。本インタビューは、コア連が十分に検討してこなかったコア・カリキュラムや「三層四領域」、アチーブメント・テスト等の研究成果の受け止め方、理論の実践への適用について、コア連の影響下にある北条小学校で、北条プランの作成から実施に携わった一教員の視点から明らかにするものである。また、本インタビューの記録はコア連との関係という視点から、北条プランの新たな側面を照らし出すものとなり得よう。

### ３．インタビュー記録の解説

本インタビューの課題意識——コア連の理論の実践への適用、学校現場へのコア連の影響——において重要となる３点について、インタビュー記録を引用し、簡単な解説を加える。重要となるのは、①「三層四領域」、②コア・カリキュラム、③コア・カリキュラム（新教育）における評価の３点である。なお、インタビューの時系列に即して解説するため、実際の時系列とは異なる。

#### （１）三層四領域について

安田：〔前略〕広岡亮蔵って人が提案したのが三層四領域なの。広岡さんは反対しながら、要するにあればね、カリキュラムっていうかな、授業をやる順序に書いたものを提案したもんじゃなくて、教科の教材がどこにあるかをね、確かめるための枠組みなの。

安田：〔前略〕ところがそれがね、そのまま実行しようとしてカリキュラム作って、北条小も作った。ここに書いてある。でっかいの。そしたらね、うまくいかねえんだな、だからこの計画はね、生活教育の鵜。鵜っていうのは偽物。

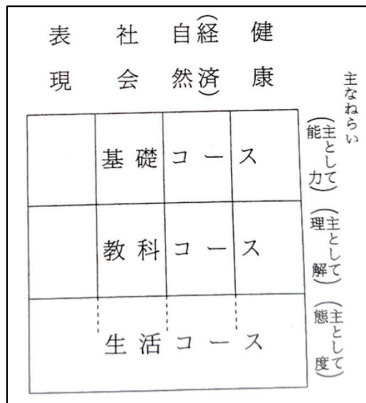
安田：〔前略〕要するにさ、教材がどこにあるかっていうのの枠組みでしょ？それを教育っていうのは流れがあって流れが。流れに従って進めなきゃいけないから。それでうまくいくはずないから。

安田：流れっていうのは、１時間だったか、今話が始まったでしょ、私なんか。それがどんどんどんどん進んでいくでしょ。この流れをつかむのがカリキュラムってやつだ。

安田：そうそう。ところがその枠がダメだったのは、枠組みしただけで動かないわけ。

（下線は筆者による。）

【図1】北条小学校のカリキュラム構造



（金木（1977）49頁。）

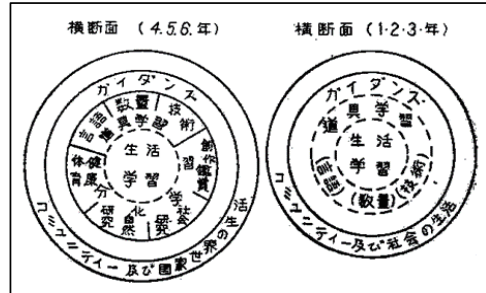
コア・カリキュラムに変わるカリキュラム構造として「三層四領域」がコア連に承認されたのは1951年8月である。「三層四領域」の原案は梅根によって作成されており、広岡亮蔵はコア連の内部から「四領域」を「牧歌的である」と批判した人物である。北条小学校では1951年度に【図1】のカリキュラム構造を構築している。「三層四領域」と北条小学校のカリキュラム構造は図示すると酷似している。北条小学校のカリキュラム構造はコア連の「三層四領域」の影響を受けたものであるといえる（林1996：141）。「三層四領域」は単元を各層各領域に分類するための枠組みであり、安田氏も「枠組みしただけでは動かないわけ」とし、その枠組みの問題性を認識していた。「三層四領域」のカリキュラム構造を実践しようとするならば、その枠組みにあてはめる単元を作成する必要があった。安田氏の証言は「三層四領域」の実践的課題を明らかにしている。

## （2）コア・カリキュラムについて

北条小学校は、1946年という戦後の早い段階からコア・カリキュラの研究に取り組んでいた。その成果は、1948年『コア・カリキュラムの構成と展開』（誠文堂新光社）として公

表された。『コア・カリキュラムの構成と展開』のなかで、生活学習（単元学習）をコアとするカリキュラム構造が提示されている。

【図2】教育の全体構造



（千葉県北条小学校（1949）28頁。）

一方、安田氏は生活学習（単元学習）のなかにもコアがあるとし、「単元で1番教えたい内容」（以下、単元コアと呼称。）もコアと認識していた。

安田：カリキュラムのコア・カリキュラム

になったけれども、それはね、3年ぐらい経ってね、公開研修会をやった時になったんだよ。それまではね、コア学習ってやってた。単元コア。1つの単元のコアっていったら単元学習、コア学習。

瀬川：単元（学習—筆者註）とコア（学習—筆者註）はどう違うんですか。コアの中に単元があるんですか？

安田：単元の中にコアがある。

瀬川：単元の中にコアがあるんですか。ということは、その単元で1番教えたい内容がコアってことになるんですか。

安田：そうそう。それでかなり済んだんだよ、私らなんかは。

（下線は筆者による。）

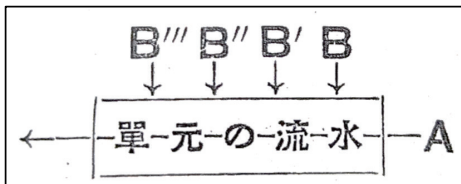
瀬川：〔前略〕コアが集まって、いろんな教材、単元のコアがあるじゃないですか？

安田：いくつあるよコアっていうのは。

瀬川：コア1つです。1つの単元に1つじゃないですか。そしたら単元がいくつもある時に、コアがいくつも生まれるってことですか？

安田：そうだ。あれで流れができていたんだ、コア・カリキュラムの、コア・カリキュラムが。1つであれば1つでいいよ。2つや3つ続けば、3つの長いカリキュラムになる。

【図3】「単元の流水」



（樋口・安田（1949）9頁。）

安田は、単元コアを設定し、単元学習を進めていくことでカリキュラムを作成し、そのようにしてできたカリキュラムをコア・カリキュラムと考えていた。北条小学校では、さまざまな場面でコアという用語が使用されていたといえる。また、このような「単元の流水」によるカリキュラム設計は、中心課程と周辺課程のあるコア・カリキュラムの実践であったことを物語っている。

### （3）コア・カリキュラムにおける評価

コア連が結成され、全国的にコア・カリキュラムの思想と実践が広まっていく時期、1949年頃より、コア・カリキュラムや単元学習、経験主義教育といった新教育による学力（読・書・算の力の）低下が指摘されるようになる。「学力低下」問題が指摘されるなかで、

おそらく1951年頃より、北条小学校も「学力低下」問題に取り組んでいく。具体的には、1つは、能力表・要素表の作製、もう1つは『標準アチーブメント・テスト』（カリキュラム研究所、1951年）の使用である。

瀬川：能力表とか、要素表っていうのが、当時結構言われた言葉だと思うんですけど、よくわからなくてどういうものなのか。

安田：能力表っていうのはね、今話したように生活教育をやればね、そういう力が落ちるっていうんだ。

瀬川：読み書き算の力ですか？

安田：ところが、落ちないんだと。勉強のなかでこういうふうなことを押さえてあるんだっていうのを、私だけじゃない。司会のね、皆川正治っていう高等師範出てね、すぐ。

瀬川：若かった。

安田：高等師範出てね、すぐね、専門のコア・カリキュラムの事務局長になった。

瀬川：そういう方なんですね。

安田：だから、この支持を得るために、こういうのやったりね、なんかこうしてやったんだ、それ（要素表・能力表—筆者註）はその一環だよ。

（下線は筆者による。）

瀬川：〔前略〕お2人（安田、増田三良—筆者註）で能力表の議論をされているってことなんですけど、読み書き算の力が劣っているって批判が出てきて、そうじゃないよって説明するための…。

安田：これ、ここに書いてあるかな。要素、要素があるはずだな。



瀬川：要素表ですか？

安田：この本を書く時に、ここに書くのや  
ってんだけど。こういう形では出な  
いな。あったんだよ。

瀬川：そうなんですか。どうやって作られ  
たんですか？要素表とかっていう  
のは。

安田：だから、ここに書かれてあるように、  
結局教科書のね、分析とかなんとか  
ね。だから、教科書を使ってさ、教  
科書を使って勉強した子どもはさ、  
これだけ字を覚えるとか、これだけ  
できるってあれがあるでしょ？そ  
れができるかできないかを調べる  
要素は教科書の分析だった。

瀬川：教科書の分析をされて、表にされて、  
そういう力が子どもについてい  
るかっていうチェックしていくって  
いう発想ですか？1つの評価項目  
みたいな。これできたかできないか  
っていう。

安田：そうそうそう。

瀬川：それ、どうやって見ていくんです  
か？この子にはその力がついてい  
るっていうのは、どうやって見られ  
たんですか？

安田：目標だから、カリキュラムを作ると  
きの基本なんだから。それを含ませ  
る流れにするんだよ。

瀬川：カリキュラム通りの教育を子どもた  
ちが受け止めたかどうかっていう  
のを、教師としてチェックする必要  
があると思うんですけど、見ていく  
ときってどうされたのかなと思っ  
て。例えば、テストで見るっていう  
のも、評価してみるってのも1つだ  
と思いますし、先生方が1人1人の  
子どもを見て、この子はこういう能  
力表に書いてある力がついたらんじ

やないかなっていうふうに考える  
こともできると思うんですけど。

安田：そういう評価はした。

(下線は筆者による。)

北条小学校は、1949年刊行の『コミュニテ  
ィーに立つ民主教育の実践』(館山市立北条小  
学校)のなかで「学習基礎能力表」を提示し  
ている。このほか、2セットも要素表・能力  
表を作製している<sup>2)</sup>。安田氏によると、要素  
表・能力表の作製のきっかけは、コア連結成  
の発起人の1人、皆川正治である。北条小学  
校は、皆川の支持を得るために要素表・能力  
表を作製しており、必ずしも北条小学校の自  
発的な取り組みとはいえなかったことがわか  
る。要素表・能力表は評価のためのチェッ  
クリストとして使用していた。

加えて、評価にはカリキュラム研究所が発  
行した『標準アチーブメント・テスト』も使  
用していた。安田氏は「それまでは北条小学  
校は正直いって、それまではやんなかった。  
それはね、どっかで出てくんだっけね」とい  
うように、1951年の『標準アチーブメント・  
テスト』刊行以前、北条小学校ではペーパー  
テストによる評価をおこなっていなかったよ  
うである。

安田：金がかかっただよ。この研究所って  
いうより、誠文堂新光社で『カリキ  
ュラム』出しただけではね、売り手  
が見つかってなくてね、それでこ  
ういう金の儲かる仕事を始めたんだ。

瀬川：そうなんですね。北条小学校でも買  
われて、実際使われたと。

安田：部分的だったと思うよ。金がかかる  
からね。

(下線は筆者による。)

『標準アチーブメント・テスト』は、『標準アチーブメント・テスト』は「小学校1年生から中学校3年までの児童生徒の社会科や中心学習（コア・コース）におけるその年度1年間の教育成果」（カリキュラム研究所1951：7）を全国的標準に立って評価することを目的としたテスト<sup>3)</sup>であり、新教育の学力を測定するために、コア連の組織であるカリキュラム研究所によって作成されたテストである。また、『アチーブメント・テスト』と同時に、その理論書となる『解説』と運用方法等を記した『手引』が発行されている。『標準アチーブメント・テスト』は、機関誌『カリキュラム』でも広告としてたびたび掲載されており、その刊行はコア連の一大事業だったようである。ところが、『標準アチーブメント・テスト』を使用していた記録が残っているのは、管見の限り、北条小学校だけである。

北条小学校では、「学力低下」問題に取り組むコア連の影響を受けて、要素表・能力表を作製し、『標準アチーブメント・テスト』を購入しながら、教育評価をおこなっていた。ただし、北条小学校は、「生活教育をやれば、そういう（読・書・算の一筆者註）力が落ちるっていうんだ」と安田氏もいうように、コア・カリキュラムが「学力低下」に繋がるとは考えておらず、チェックリストやペーパーテストによる評価には消極的であったと推測できる。

## 5. おわりに

本インタビューは、コア連の理論——コア・カリキュラムや「三層四領域」、アチーブメント・テスト——の学校現場での受け止め方について、北条プランを実施した安田氏に尋ねたものである。本インタビューにより、次の3点が明らかとなった。1点目は、「三層四領域」はあくまで実践を方向づけるための理論的な枠組みに過ぎず、「三層四領域」を機能さ

せるためには、多くの単元を作成する必要があったこと、である。2点目は、単元にコア（1番教えたい内容）をつくり、コアのある単元をいくつも組み合わせることで（コア・）カリキュラムを作成していたこと、である。こうして作成されたカリキュラムをコア・カリキュラムとも呼んでいた。中心課程と周辺課程からなるカリキュラム構造のみをコア・カリキュラムとはとらえておらず、コア・カリキュラムは学校（教員）独自の解釈がある用語であった。3点目は、北条プランは評価に対して消極的であったこと、である。コア連との関係のなかで、要素表・能力表や『アチーブメント・テスト』を使用して評価を進めていた。

以上の安田氏の証言は、北条プランの視点からみると、北条プランは北条小学校による完全にオリジナルな教育課程編成プランではなかったことを明らかにしている。一方、コア連の視点からみると、コア連によるカリキュラム構造の提唱や『標準アチーブメント・テスト』の作成は理論の域を出なかったことを明らかにしている。コア・カリキュラムや「三層四領域」といった生活経験主義にもとづくカリキュラムは、実践においては、単元の開発が最重要課題であり、評価にまで意識が及ばなかったのではないだろうか。

本インタビューは北条プランそのもののなりたちや取り組みを明らかにするものではなかったため、安田氏の証言を踏まえて、北条プランの価値を再検討することができなかったことが課題である。

最後に、インタビュー当時104歳でありながら2時間超にも及ぶインタビューに、大好きなサイダーを飲みながら、笑顔を絶やさず丁寧に応えてくださった安田氏の姿を今も覚えている。生前に本インタビュー成果を手渡しできなかったことが悔やまれる。



## 註

- 1) ただし、金馬によるインタビューは単元や単元習作の視点からおこなわれたものであり、本インタビューの内容とは異なる。加えて、金馬によるインタビューは安田1人へのインタビューではない。
- 2) 北条小学校の要素表・能力表については金馬(2016)に詳しい。金馬は「コア・カリキュラムの関係校と見られる小学校約170校分の545冊の冊子類(研究紀要、カリキュラム表の集録、指導案集など)を収集してきたが、そのうち45校に能力・要素表が発見できた。とくに、館山市立北条小学校のものが対象とする価値が高いとわかった」(金馬2016:63)とし、北条小学校の要素表・能力表を高く評価している。
- 3) 『標準アチーブメント・テスト』は一部しか現存していない。『標準アチーブメント・テスト』の一部は筆者が入手している。しかし、『標準アチーブメント・テスト』の全体はわからない。

## 引用・参考文献

- 新井孝喜(2001)「三層四領域」日本カリキュラム学会編『現代カリキュラム事典』ぎょうせい、24頁。
- 金木賢三(1977)『教育とロマン』館山市立北条小学校。
- カリキュラム研究所(1951)『標準アチーブメント・テストの手引』誠文堂新光社。
- 金馬国晴(2004)「コア・カリキュラム」日本教育方法学会編『現代教育方法事典』図書文化社、534頁。
- 金馬国晴(2016)「教科・活動・能力のトリレンマ」『教育方法学研究』41、61-72頁。
- 金馬国晴(2019)「戦後初期の単元はいかに構成されたのか」『横浜国立大学教育学部紀要Ⅰ(教育科学)』(2)、11-27頁。
- 斉藤俊彦(2001)「コア・カリキュラム連盟」久保義三・米田俊彦・駒込武・児美川孝一郎編著『現代教育史事典』東京書籍、452頁。
- 黒澤英典(1982)「北条プランにおける初期社会科教育の実践」『社会科研究』(30)、116-125頁。
- 杉本真由美(2008)「戦後初期の千葉県北条プラン

におけるカリキュラム構造の変容の検討」『教育研究』(50)、67-77頁。

千葉県北条小学校(1949)『コア・カリキュラムの構成と展開』誠文堂新光社。

中西修一郎(2017)「戦後初期における北条小学校のカリキュラム開発に関する一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』(63)、257-269頁。

中野光(1984)『「カリキュラム」と生活教育運動』中野光編著『カリキュラム(付録・解説・総目次・固有名詞索引)』日本図書センター、185-234頁。

林尚示(1996)「戦後教育改革期のコア・カリキュラムに関する研究」『教育学研究集録』20、135-145頁。

樋口澄雄・安田豊作(1949)「生活カリキュラム実践の反省と批判」『教育社会』4(10)、5-9頁。

広岡亮蔵(1950)「牧歌的なカリキュラムの自己批判」『カリキュラム』(15)、12-17頁。

安田豊作・北条教育を語る会(1986)『未来への年輪』東洋館出版社。

## 謝辞

本研究は、住友生命第15回「未来を強くする子育てプロジェクト」の助成を受けたものである。